東京2020パラリンピックの成功と
バリアフリー推進に向けた懇談会
第3回

―議事録―

日時：令和２年１月15日（水）11時00分～13時00分

場所：東京国際フォーラム　ホールＢ５

（ナレーション）
　ただ今より、第3回東京2020パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会を開会いたします。初めに懇談会メンバーが入場いたします。
　髙橋儀平さん。川内美彦さん。稲垣具志さん。星加良司さん。秋山能久さん。花岡伸和さん。二條実穂さん。小島永士さん。三浦浩さん。倉田秀道さん。モハメド・オマル・アブディンさん。風間俊介さん。髙桑早生さん。大黒摩季さん。萩本欽一さん。中畑清さん。野﨑洋光さん。林家三平さん。野村祐介さん。葭原滋男さん。猪狩ともかさん。眞鍋かをりさん。イルカさん。テリー伊藤さん。根木慎志さん。本懇談会の名誉顧問、谷垣禎一名誉顧問。小池百合子都知事。
　ここからの司会進行は、懇談会メンバーの眞鍋かをりさんにお願いしたいと思います。眞鍋さん、お願いいたします。

【司会（眞鍋かをり氏）】
　ご紹介いただきました眞鍋かをりです。本日、司会を務めさせていただきます。よろしくお願いします。
　懇談会、第3回ということですけれども、私も第2回から参加させていただいて、本当にいろんな業界からさまざまな方が参加されて、いかにしてパラリンピックを成功させるかということを、いろんなお立場からの意見、飛び出しまして、すごく懇談会、盛り上がりました。私自身はこの懇談会を通して、初めてパラアスリートの方々とお話しする機会を持たせていただいたんですけど、やっぱりこうして触れることによって、本当に心からパラリンピック、楽しみになりましたし、すごく気分が盛り上がってきました。ということで、きょう参加されている皆さまも一緒に、きょうこの会場の皆さんで、パラリンピックの成功に向けて盛り上げていただければと思います。最後までお付き合いいただきますよう、よろしくお願いします。
　それでは、パネルディスカッションに先立ちまして、当懇談会座長、小池知事よりご挨拶させていただきます。小池知事、よろしくお願いします。

【小池知事】
　きょうは思ったほど寒くはない。でも、雨でございます。その中、こちら、国際フォーラムにお集まりいただきまして、パラバリ懇、この懇談会のほうにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。きょう、国際フォーラムでありますけれども、オリンピックではウエイトリフティングの会場、そしてまたパラリンピックではパワーリフティングの会場になる所でございます。
　きょうが3回目ということで、この後、皆さま方とのパネルディスカッション、どうやってこのパラリンピックを成功させるのか。そして、このパラリンピックを機会に、東京の街をどのようにバリアフリーにしていこうかということ、両方を考えるということでお集まりいただいております。

もう2020、2020年大会、その年となりました。パラリンピックについては、ちょうどあと223日で開会ということになります。どんどん迫ってくるという感じですね。そして、どれぐらいバリアフリーが進んでいるのか。きょうはこちら国際フォーラムの会場でもございますので、また皆さま方にチェックをしていただければ、ここ、こうしたほうがいいよ、などのご意見を賜ればと思います。

前回、2回目のパラバリ懇のときには、海の森水上競技場を実際見ていただきまして、そのときもシャワー室の在り方とか、鏡の高さとか、実際はもう会場はでき上がっている中において、またご意見を、頂戴をいたしまして、そのご意見をベースに、また改善も行ったところであります。年末には、このパラバリ懇のメンバーでもいらっしゃいまして、きょうも二條さん、来ていただいていますね。ありがとうございました。それから市川海老蔵さん、そして髙橋先生と一緒に、この周りの車道と歩道との段差についてどうなのか。それから駅のエレベーターがどういう状況なのか。実際にみんなで歩いて確認もしてまいりました。

まさにパラバリ懇というのは、パラリンピックを通じて東京の、首都東京の街を、バリアフリーを促進していくということで、誰にも優しい東京づくり、誰にも訪問しやすい、インバウンドの方でも、障害のある方でも、東京は楽に来られる、そういう街にしていきたいと考えております。

パラバリ懇のメンバー、どんどん、おかげさまで増えておりまして、そして、そう、どんどんじゃなくて、バンバンですね。バンバン、キーワード、バンバンなんです。バンバンやっていきましょうということから、欽ちゃんが、これはバンバンの会だということで、お声、掛けていただいておりますが、ぜひ、このバリアフリー化ということを、ぜひとも、これをきっかけに進めていくように、皆さま方のお声、障害のある方もそうでない方も、それから学術経験のおありの方々からも、いろんなご意見を賜っていきたいと思っております。

パラバリ懇のメンバーである葉加瀬太郎さんが、先ほどから聴こえていますバックグラウンドミュージックですが、これをわざわざこのパラバリ懇、そしてパラリンピックのために作ってくださいました。きょうもいろんな機会にこの音楽、すてきな音楽、『Legacy』っていうタイトルにしていただいていますが、これをお楽しみいただきながら、皆さま方のご意見を頂戴し、そして大いにパラリンピックを成功させていきたいものと思います。

それから長くなりますけれども、パラリンピックの成功なくして東京大会の成功はないと、このように申し上げておりますが、じゃあ、何をもって成功かというと、一つの目安が、大会会場が観客、応援の皆さんで満杯になるということでございます。満杯になるためにはどうするかというと、皆さま方に切符を確保して、チケットを確保していただく。そのための第2次のチケット抽選申込の受付が、きょうから、1月15日から始まります。2次募集になります。宝くじは買わないと当たらない。パラリンピックを現場で応援するためには、まず募集に応じていただけなければ、そこには行けないということでございます。

いろんな、これから工夫もして、大会会場を子供たちも含めて満杯にして、大いに

沸き立つ、そんな東京大会に、皆さんと共にしていく、そのことを目標に、きょうのパラバリ懇、最後までどうぞよろしくお願いを申し上げます。本日はありがとうございます。

【司会（眞鍋かをり氏）】
小池知事、ありがとうございました。
それではパネルディスカッションのほうへ移りたいと思います。本日は二つのテーマについてパネルディスカッションを行っていきます。それではパネリストの皆さま、お席のほうへご移動お願いします。
まず一つ目のパネルディスカッションのテーマは『円滑な移動の確保』についてです。パネリストをご紹介いたします。日本大学理工学部助教、稲垣具志さん。
車いすテニスの選手として、2016 年リオデジャネイロ大会に出場されたパラアスリートの二條実穂さん。
パワーリフティングの選手として、2012 年ロンドン大会、2016 年リオデジャネイロ大会に出場されたパラアスリートの三浦浩さん。
学習院大学法学部政治学科特別客員教授、モハメド・オマル・アブディンさん。
そしてファシリテーターは、東洋大学名誉教授、髙橋儀平さんです。
それでは髙橋さん、よろしくお願いします。

【髙橋儀平氏】
ただ今ご紹介いただきました東洋大学の髙橋儀平と申します。どうぞよろしくお願いいたします。大変、短い時間ですけれども、最初のセッションを進めていきたいと思います。
先ほど小池都知事のご挨拶ありましたけども、あっという間にもう 2020 大会直前、目の前です。そして今、まさに最初のテーマであります東京のあちこちで公共交通機関の工事が進んでいます。少しずつ、そしてさらに 2020 を越えて良くなっていくのではないかというふうに思います。そういう、きょうは短い時間ですけども、期待感を込めてパネルディスカッションを進めさせていただきたいと思います。
ご承知のように東京、大都市ですけれども、外国の方もたくさん来ています。今、東京の統計では大体 4 パーセントから 6 パーセントの方が外国人の方だっていうふうに、住んでいらっしゃるということですけども。そして高齢化も間もなく 4 人に 1 人。それからさまざまな障害を持っている方々も、統計では 7 パーセントですけど、恐らく 7、8 パーセント、もっといってるのかなという感じがします。LGBT の方々もたくさんいらっしゃいます。そうすると、もう 3 人に 1 人以上の方々が、さまざまな情報ですとか、移動ですとか、制約を受けているっていう形になります。そういった人たちも含めて、安全・安心な東京、そして 2020 大会を越えて、さらに先に進むような街づくりを、みんなで一緒に考えていければというふうに思います。
それでは早速ですけども、最初に稲垣さんのほうから基調講演ということで、大変、短いんですけども、ひとつよろしくお願いをしたいと思います。

【稲垣具志氏】

皆さま、こんにちは。日本大学の稲垣と申します。バリアフリーという言葉を聞くと、まずやっぱり移動のバリアフリーということが真っ先に出てくるんじゃないかと思いますけれども、私はこの移動のバリアフリーで私たちのできる役割は何かということについて、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

東京は、この 2020 大会を迎えて、かなりこのバリアフリーの整備が進んできています。エレベーターによる段差解消であったり、プラットホームですね。駅のプラットホームのホームドアであったり、あとは道路の整備であったり、車いす、そのまま乗れるようなノンステップバスであったりとか、こういったようなものの導入がどんどん進んでいるわけであります。

ただ、このようにバリアフリーの整備は、ものすごくいろんな方々が頑張って進めているわけなんですけれども、ちょっと気になることがいくつかあります。きょうは、ちょっと、そのうちの二つをお話ししたいと思います。

一つ目は、こういった頑張って造っている施設とか設備があれば、それで、じゃあ、バリアフリーの問題は解決なんですかといったような問題提起です。

実は、まだまだ困り事っていうのは残っているっていうのがあります。どれだけ設備を作っていても困り事はなくならないといったような実情があります。例えば、ここ、有楽町ですけれども、有楽町の JR のプラットホーム、あそこは山手線と京浜東北線が並んで到着してきます。島式ホームといいますけれども、これ、今はどちら側にもホームドアが付いているんですが、最初は山手線側だけに付いていました。そうすると、目の不自由な、見えない方々は、この駅はホームドア付いてるんだと思って、実は付いてない側から転落し掛けるといったような、こういったような、まだまだ成長過程だからこその問題というのは残されていたりするわけです。

この右のとこを見ていただくと、音サインっていうのがあります。これは、ぴーんぽーんとか、ぴよぴよぴよっていう小鳥のさえずりとか、あとは駅員さんのアナウンスとか、いろんな音が流れています。これが、あまりにもいろんな種類の多さの音が鳴り過ぎるとか、あとはこれ、安全のためだと思うんですけれども、駅員さんのアナウンスがすごく音量が大きくなったりすると、聴覚過敏という方がいらっしゃって、もうその場にはいてもたってもいられない。この駅は利用できないといったような困り事を感じる方もいらっしゃるんです。

左下には誘導サインと書きました。これは、例えば乗り換えのときに、何とか線ということで、私たちはサインを見ながらルートを決めていきます。すごく便利なんですけれども、実は外国から日本に来たての方々というのは、このようなサインの使い方、まだ慣れていません。なので、結構うろうろしながら、どこに行くのって、サイン見ればいいのにと思うかもしれないけども、使い方が分からない方も結構いらっしゃるわけです。車いすの方とか低身長の方は、視線が意外と低くなりますので、高い所にあるサインが見えないといったような困り事もあります。

右下には、横断歩道口と書きましたけども、次のページをお願いします。写真を載せましたけれども、横断歩道の入り口っていうのは、歩道側に視覚障害者の方々に対して、ここ、横断歩道だよっていうことを示すために、ぷつぷつが、こうありますね。床に点状のブロックが付いています。それに対して接続されているのが、線の形をしたブロックがあるのを、皆さん、ご存じですか。この線のブロックっていうのが、実はそのまま延長していくと、横断方向を示すというルールが、実はあるんです。

ところが、この左の写真を見ていただくと、このまま、この線を信じて真っすぐ行くと、この壁にどんとぶつかりますね。その後、ううんって、どこだろうって迷ってしまうわけでございます。

それとか、右とかは、このつながってる線のブロックが変な方向、向いてますね。横断方向のほう、向いていない。ということは、このまま実は交差点の中に入っていってしまうといったような形で。こういった間違った方向に横断する可能性があるといったことになります。

実は、これは東京都内の写真ではございませんので。ただ、東京都内にも、このように似たような状況というのはあります。今回は写真は載せていませんけれども、こういった困り事を持っている方っていうのは、視覚障害でいるっていうのは、皆さんはご存じだったでしょうか。こういったことに一体、誰が気付くんですかということになるわけです。

じゃあ、続きまして、その2、二つ目です。人のサポートは本当に連続しているのといったような話です。このように鉄道駅A、鉄道駅B、そしてバス停。これ、お互いに乗り換えができるようなターミナルだと思ってください。鉄道駅Aとか鉄道駅Bの中では、もう駅員さんが人のこのサポートを受け渡していくわけですね。完璧なわけです。バス停の運転手は素晴らしい接遇。お願いします。バス停の乗降も完璧にサポートする。

ただ、この後、バスを降りた方っていうのは、鉄道駅Aまで乗り継ぐ間とか、バス停から鉄道駅Bまで乗り継ぐ間、じゃあ、ここは一体、誰がサポートするんでしょう。鉄道駅の会社の方、鉄道会社の方々は、自分の管理の中ではすごく完璧にサポートします。バス会社の方々も、自分の車両とか、運転手さんの接遇の教育とか、すごくされています。ただ、その間は一体、誰がサポートするんでしょうか。こういったような、実は人のサポートが連続していないといった問題も、往々にして見受けられるわけです。

この一つ目、二つ目、それぞれに対しては、やっぱり施設整備の足りないところは誰かが気付いて、困り事をサポートする必要がある。そして二つ目は、この人のサポートのバトンをつないでいく。それは、その周りにいる私たちの役割ということになってくるわけです。管理者とか事業者に全てお任せするのではなくて、私たちがすぐそばにいるのだから、できることがあるんではないかといったような提案です。よくある困り事。先ほど私が申し上げたお困り事、皆さまはご存じだったでしょうか。それを世の中、街の中にはいるんだということを理解すること。そして、その困り事に対して、私が具体的にできることは何かということを気付くことが大切です。

そのためには、今、この下に出しました、他の人たちに対する関心がすごく重要です。日本の中では、今、歩きスマホがあまりにも多いです。もう他者に対する関心が全くない。これは、僕は動くマンガ喫茶とか、動くネットカフェって言ってますけれども、こういう全く関心の中で公共空間をみんなが動いている。これは大きな問題だと思います。

そして今、この一つ上ですね。この三つ目に書きました、その人の必要に対する行動の選択。これは、みんながみんな、車いすに乗ってる人は、ずっとサポートが必要ということではないです。中にはそういう方もいらっしゃいますけれども、私は自分でなるべく動いていく。ただ、ちょっと困ったときに助けていただきたい、サポーターが欲しいっていう方もたくさんいらっしゃるんです。同じく、例えば障害をお持ちの方、高齢者の方でも、多様性が豊かですので、それぞれに適した行動を選択する必要があります。見てても分からないですので。そうしましたら、関心を持った私たちは積極的にコミュニケーションを取っていって、その人の必要を捉えていくということがすごく重要なのではないかというふうに思います。

私から、移動のバリアフリーについて、最初の基調報告ということで、お話をさせいただきました。ありがとうございます。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。若干オーバー気味ですけれども、後ほどまた調整をしたいと思います。

それでは2番バッターですけども、秋山さんにお願いをしたいと思います。秋山さん、専門が料理ということですけれども、ひとつご自身のお店のことも含めて、お話をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【秋山能久氏】

よろしくお願いします。銀座六雁の秋山と申します。私もレストラン、銀座にありますけども、たくさんのお客さま、いらっしゃいます。もちろん外国のお客さま、どんどん、どんどん増えている、今、現状であるんですけれども。レストランは、お客さまを選べないんです。いろいろなお客さまがいて、それに僕らがいかに対応していくのか。それは日々考えながら、いろんな情報を得て、インプットしたものをお客さまにどうアウトプットしていくのかっていうのが、常日頃、僕たちに課せられてる課題であります。

特にオリンピック、パラリンピック、たくさんの方々が来ること、これはレストラン、今、僕ら、予想ができないんです。どのぐらいのお客さまが来るか、本当に全く読めない中で、いかにそこで僕らは情報収集をして、来ていただくお客さまのためにどれだけ心を寄り添えて、おいしい物を食べていただき、日本の豊かさを知っていただき、そして日本を愛していただけるかっていうことを考え、そこに向けてスタッフ一同が一つになり、いろんな情報をインプットしたもの、そしてそれをスタッフ側からもアウトプットできるような形に、今、していこうというふうに取り組んでおりま

す。
　また、たくさんのお客さまたちに、レストランの情報だけではなくて、いろんな交通網であったりとか、どこに行きたいかとか、そういうこともレストラン側から発信し、そして今はスマホ一つでいろんな所に行けるかもしれないですけども、そこは心をつなぎ合わせて、寄り添っていくこと。これが僕は日本のレストランの在り方なんではないかなというふうに思いながら、日々過ごしております。
　それと、やはりたくさんの方が来ると、動きというものが読めなくなってしまう。いろんな障害を持った方々であったりとか、車いすの方々。うちのお店もバリアフリーではあるんですけれども、どこまで対応したらいいのかっていうことを、やはり僕らもトレーニングすることが大事なのではないかなというふうに思い、その勉強会であったりとかっていうものを、スタッフの中で今やってるところでもあります。
　また、私も、自分自身、小さい子供がいるんですけれども、バスに乗ったり、電車に乗ったりするときに、当事者になって初めて不自由さを感じる。これは、いろんな視点からものを見ていくことで、自分自身、気付かされる部分っていうのがあるし、これは本当に皆さんの気持ちになって考えてあげる必要があるのではないかというふうに思っております。今後、いろんな課題を整理しながら、もう間近に迫ってはきておりますけれども、そこに向けてみんなで取り組んでいければいいと思っております。ありがとうございます。

【髙橋儀平氏】
　ありがとうございます。

【司会（眞鍋かをり氏）】
　ありがとうございます。パネルディスカッションの途中ではありますが、今、林家こん平さんが到着されました。ここから参加していただきます。よろしくお願いします。では、どうぞ、続けてください。お願いします。

【髙橋儀平氏】
　それでは続いて進めさせていただきたいと思います。それでは次に三浦さんですね。順番、ちょっと若干、間違いました。失礼いたしました。では、三浦さん、お願いします。

【三浦浩氏】
　三浦です。こんにちは。私は、ちょっと情報提供の観点からお話しさせていただこうかなと思うんですけども。
　普段、やっぱり都内の移動って、僕、車が中心なんですね。なかなか電車とかバスとか乗らないんですけども、やはり時々乗ると、まずどこに行ったらいいか分からなかったり、改札がどっちにあるんだろうだったりとか、エレベーター、どこにあるんだろうっていうことで、かなり迷うことがよくあります。そんな中で、やはり自分の

中で、今、これから5Gっていう時代、分かりますか。いわゆるスマホの通信スピードが速くなったりとか、データ容量が多くなって、いろんな情報がこれからもっと早く読み取れるっていう時代が来るんですけども。そこで僕の中では、ちょっと三つのキーワードがあるんですね。

一つは、QRコードって、皆さん、ご存じですか。QRコード。多分、物、買うときに、ぴってかざして、QRコードであったりすると思うんですけども。これが最近、点字ブロックにQRコードを埋め込んで、視覚障害者がスマホと白杖を持ってかざしていくと、ガイド案内をしてくれるというのを、今、システム的に開発されてます。これがあると、僕らも点字ブロックに沿って、スマホを持っていくと、どこに行きたいかとかっていうのを、やっぱり案内してもらえる。そうすると、やはり車で移動してて、時々電車に乗るときも、自分もそれで迷わなくて済むっていう。今、これが自分の中では非常に早く開発してほしいなと思います。一つはQRコードです。

もう一つは、XPANDコードって、皆さん、聞いたことありますか。今、これ、開発してるんですけども。こういう画面にバーコードみたいな、長細いバーコードみたいなものが印字されてるんですけども。それを皆さん、スマホでぷっとかざしてもらうと、この画面がスマホで見えたりとか、別の情報がスマホで一緒に見えたりとかってするシステムが、今、開発されてます。これも非常に、やはり有意義なのが、もう一つ、緊急時の避難をするときに、その緊急避難のときのバーコード、このXPANDコードを読み取ると、自分が、今、その位置にいて、どこへ逃げればいいかっていう情報も見れるんですね。また、翻訳だったりとか、外人の方にも英語で説明できたりとかっていう形の、今、システムが非常に開発されてますので、これも非常に楽しみです。

もう一つは、ビーコンって、皆さん、聞いたことがありますか。車を運転してカーナビをやってる方は、多分、ビーコンがあったところに渋滞情報とか、多分、来ると思うんですけども。これが最近、施設の中でビーコンがあると、位置情報が地下でも見れるという形が、今、またこれも開発されてます。

この三つをうまく組み合わせると、自分がどこに行って、どこにいてっていう情報が、これからこの2020年に、多分、進んでくるんではないかと思います。もう一つ、これは東京都のほうで、TOKYO Data Highwayっていう企画を、これからいろいろ促進していっていただけると思うんですけども。これも踏まえると、やはりどんな方でも、外人の方でも日本人の方でも、いろんな方が、いろんな情報が自分の言語で見れて、どこに何があってっていう案内が、やっぱりこれから進んでくるっていう時代が、この2020年だと思いますので、ぜひ、これも皆さん、注目していただければと思います。ありがとうございます。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。それでは続いて、3番手ですけれども、アブディンさん、お願いいたします。アブディンさんは国際政治学者としてご活躍されております。

【モハメド・オマル・アブディン氏】

アブディンです。日本には、平成が1桁から2桁に変わった年に、日本に来ました。きょうの話は、一視覚障害者としての移動にまつわる問題を共有したいと思います。決して、私の考えが視覚障害者全体のニーズや意見を代表するものではありませんので、そこを分かっていただきたいと思います。

まず、先ほど稲垣さんのお話にありました移動の際のホームドア問題は、依然として状況は改善してるものの、まだまだ危険な駅がたくさんあるわけですね。視覚障害者の間に悪いジョークがあって、ホームから転落しない障害者は一人前の視覚障害者じゃないという、あまり面白くないジョークがあって、実は結構、落ちてるんです。私も落ちてるんですね。

なぜ落ちてるかというと、じゃあ、駅員に頼めばいいんじゃないかということは言われますけど、これは相当、待たされます。鉄道会社は、視覚障害者に対するサービスは本業務として捉えてるかどうか、私は分かりませんけれども、そこで本業務として捉えてるのであれば、一般の方々と大体、同じ、差し支えのない時間、移動時間の短縮をしてもらいたいと思います。場合によっては20分以上、待たされたりすることもあります。なので、多くの視覚障害者は自力で、駅、分からなくても駅を自分で行こうとして、転落したりします。残念ながら、昨年には私の身の回りで2人の方が亡くなったんですね。そういった問題は、ぜひ、本当に早く解決するとともに、それまでに都民の皆さんもそうですけども、視覚障害者がホームを歩いているときに、ぜひ、声を掛けてあげていただきたいと思います。

もう一つの問題は、必ずしも移動ではないんですけども、障害者の全体のニーズは一つじゃないんですね。むしろ、ぶつかることが多いです。三浦さんのニーズと私のニーズは、ぶつかることはたくさんあると思います。例えば視覚障害者にとっては、点字ブロックというものがありますけれども、これは車いすで点字ブロックの上に行くと、がたがたして非常に痛いんですね。腰が。私も事故で、交通事故で3カ月、車いす生活したことあるんですけども、これは車いすユーザーにとっては、この点字ブロックは非常に障害になってるんじゃないかと。そういった利害がぶつかってしまうことがあります。

誰でも、トイレもそうですけども、視覚障害者として入ってみると、どこにあるかっていうことで、配置が統一されてないですね。流して、流すボタンを、押そうとしても、レバーであったり、ボタンであったり、センサーであったり、全然、見つからなくて、諦めて出ようとした瞬間に、センサーでこう、じゃーっとなったりとかすることはありますので。誰のために作ってるかということで、誰でも使えるものって簡単に作れないと思うんですね。なので、そこは本当に現実的なもの。これはもう車いすのためのものであるということを、はっきりさせたほうがいいと思うんですね。こういったバリアフリーの考え方があります。

三つ目は、先ほど移動の、駅の移動の件ですけども。私、ロンドンに住んだことがありますけれども、決してロンドンの鉄道網は、日本には、東京には勝てるものではありませんけれども、一つすごく重要なサービスがあります。これはVIPサービスっていうんです。VIPですね。これはVery Important Personじゃなくて、Visually

Impaired Person、視覚障害者向けのサービスで、駅に着けば、すぐに、改札口の横にボタンがあって、押せば、すぐに駅員さんが飛んできてくれます。すぐに、すぐに来て、電車に乗せてくれます。待たないですね。乗せた後に、行き先に連絡します。なので、これは本業務として捉えているものだから、スムーズに待たずに移動ができるので、ぜひ、東京の鉄道会社と自治体のほうで協力していただいて、スムーズな移動を確保していただけたらと思います。

時間が、大丈夫？もう。すいません。時間になりましたので、ここまでにしたいと思います。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。とても参考になるお話をいただき、ありがとうございます。それではパネリストの最後、二條さん、よろしくお願いいたします。

【二條実穂氏】

よろしくお願いします。今、東京都さんが特にハードの部分の整備を進めてくださっております。先ほど、都知事からもご紹介いただきましたが、先日、市川海老蔵さんらと共に、この有楽町の視察をさせていただきました。私自身も、そのとき初めて知ったことも、正直ありました。

例えば、駅のホームドアを設置するまでに、まずホームドアの荷重に耐えられるかという土台の工事があるということです。これは説明を聞いて初めて、なるほどと思いましたし、そのような理由もあり設置するまでに時間がかかってしまうということも、そのときに知りました。

また、車いすユーザーにとっては、段差というものがないに越したことはないのですが、それが逆に、今もお話ありましたとおり、視覚障害者の方にとっては、歩道と車道の段差が完全にフラットだと、そこに気付きづらくなってしまうということもある。全ての人にとって使いやすい道路を造らなければいけないということも、あらためて実感いたしました。

私は車いすになる前、実は大工をやっていました。建築の世界にいたもので、“必要な段差”というものもあると考えております。世の中全ての段差をなくすということは難しい。そのある段差、どうしても必要だったり、残ってしまっている段差を、どうすればバリアフリーにできるのかというと、それはやはり皆さんのサポート、心のバリアフリーというソフトの部分でのサポートがあってこそ、真のバリアフリーになるのではないかなと考えております。

2020 大会の日本での開催が決定し、そしていよいよ本番が近づくにつれ、バリアフリーという言葉自体も、皆さん、聞く機会が増えたんじゃないかなと思います。それにより、今、お食事に行く際、ウェブサイトなどでもバリアフリーの表記というのが、〇か×ではっきり書かれていたりもします。ですが、決して×な所が完全に NG というわけではなくて、たとえ段差があったとしても、そこをソフトの面、皆さんのサポートで解決して、〇に変えていけたらいいなと考えております。

そのためには、先ほどもお話がありましたが、人と人とのコミュニケーションというものが、本当に大切だと思っています。私は選手生活の中で海外遠征など海外での時間も多かったのですが、日本よりもやはり海外に行ったときのほうが、車いすユーザーであろうとなかろうと、まず人と人とのコミュニケーションを取っているという印象が正直あります。その部分、東京 2020 大会をきっかけに、いろいろな方々と皆さんがコミュニケーションを取って、そしてバリアフリーな東京になったらいいなと考えています。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。大変、短い時間でお話をいただきました。恐らく、間もなくやってくる 2020 に間に合うように準備はしてますけども、公共交通機関、いろんなところでたくさんの手段がありますので、全てが 100 パーセントって難しいかというふうに思います。そして、先ほどお話がアブディンさんからありましたけど、やっぱり一人一人、ニーズが違うかもしれない。そして、今、お話ありましたように、やっぱりさまざまな段差は依然として残る。そして、場合によっては、後半の話にもなるかもしれませんけど、残していい段差と、残してはいけない段差があるかもしれない。そこを私たちが何をつかみ取るかというのは、非常に重要。そして、前半の情報の部分では、やっぱり情報がたくさん出てきてるけど、それを整理するというお話なんかも、三浦さんのほうからありました。

大変、短い時間なんですけど。一言ずつ、私のほうから質問するというよりも、一言、これだけは言っておきたいっていうのがありましたら、お願いをしたいと思いますけども。じゃあ、最初にお話ししてただいた稲垣さんから短めに一言だけ。

【稲垣具志氏】

分かりました。稲垣ですけれども、私はこの 7 分の中に、うわっと凝縮してお話をさせていただきましたので、あれが全てでございます。やはり、ある視覚障害者の方、当事者で、こんなことおっしゃった方がいて。ある方が迷いやすい某愛知県のとあるターミナル駅、改札から出るときに、「どんな情報が必要ですか、どんな施設が必要ですか」みたいな質問をしたら、「何も要りません」って言うんですね。「え？　なんですか」って言ったら、「私、人に聞くもん」って、「普通、そうでしょう」とかって言うんですね。

だから、なんか障害を持ってるから何か対応しないといけないといったような感覚ではなくて、人と人とのやっぱりお付き合いの中で、できることをやっていくし、困り事に気付くしっていう、ごくごく当たり前のことっていうのをやっていく。ハード整備だけで、がちがち固めていく。それも重要ですよ。重要ですけれども、そこに重要な人間と人間との社会性といったもの。そういったものを忘れてはならないというふうに、私は常日頃から思っている次第です。以上です。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございます。じゃあ、すいません。秋山さん、お願いします。

【秋山能久氏】
そうですね。私もお店の前でお客さまをお出迎えすると、たくさんの方々が「ここ、どこ行ったらいいのか」というふうに、いろいろ場所を聞かれるんですね。それも、スマートフォンや iPad だけでは対応できない。それを見ても分からない方々もたくさんいらっしゃる。その中で、やはりそこに寄り添ってあげること。それが本当に一番のサービスなのではないかなというふうにも思っています。
また、オリンピック、パラリンピックなどでは、ボランティアの方々がたくさんいらっしゃると思うんですけども、ボランティアの方々がたくさんの情報を持って、それを発信できること。そして、それは、そのボランティアの方々の情報の共有をしっかりと回していくことで、より良いパラリンピック、オリンピックになっていくのではないかなというふうに思っております。

【髙橋儀平氏】
じゃあ、順番に二條さんから。

【二條実穂氏】
そうですね。車いすの人を見掛けたときに、どんなサポートをしたらいいんだろうと、皆さん考えてくださることもあるかと思うのですが、“車いすの人だからこうしなければいけない”というよりも、困ってる人がいれば、どうしましたかと声掛けをいただいたり、障害の有無に関係なく、健常な方であったとしても何か困っていればそのときに声掛けをしていただけると思うんです。それが、一番、心のバリアフリーといいますか、普通のことなのではないかなと思いますし、“何かをしなければいけない”というような意識ではなく、そういったフラットな感じで接していただくというのが一番いいのではないかなと思います。

【髙橋儀平氏】
ありがとうございます。三浦さん、お願いいたします。

【三浦浩氏】
先ほどもアブディンさんが、実は点字ブロックが、私たち、邪魔なんじゃないかって言ってらっしゃいましたけども、僕は逆で利用させていただきます。点字ブロックのちょうど真ん中を歩いていくと、歩行者の方がどけてくれるんですね。もう一つは、点字ブロックに沿っていくと、どっかの出口に出れたりとか、道案内をしてくれる。だから逆に欠点を有効に使わせていただくというのが、僕の考えであります。以上です。

【髙橋儀平氏】

三浦さん、ありがとうございました。アブディンさん、お願いいたします。

【モハメド・オマル・アブディン氏】
ちょっと抽象的な話ですけれども、やっぱり障害者が社会参加できるような、できるための制度はいろいろありますけれども、制度は必ずしも一人一人のニーズに対してちゃんと対応しているわけではないです。これから一人一人のニーズに対して、自治体もそうですけども、制度が対応できるようにしていかなきゃいけないんじゃないかなと思うんですね。
例えば社会参加に必要な通勤に際しては、例えば移動、移動、絶対に必要な、移動の際に介助の必要な障害者はいるんですけども、通勤には使えませんよと言われると、そうすると働けなくなっちゃうと。そういうことが起きますので、スムーズな移動、イコール、雇用の機会が増える、イコール、社会参加ができることですので。誰かが、障害者が、生産性がないと言ってる連中もいますけども、まずやること、やるべきことをやって、しかるべき環境をつくってから、そのことを言っていただきたいと思います。

【髙橋儀平氏】
ありがとうございました。残り時間、本当にわずかになってしまいましたけれども、きょうのお話で少し見えてきたのは、とても良かったのは、ぶつかり合う。だけど、三浦さんが、いや、ニーズが違うところはむしろ利用させていただくというのが、きょう、お話、出てきました。これはすごく重要で、共生社会の在り方の中でも、よく、みんな違って、みんないいって言い方をしますけども、違うからこそ、そういうものに向かっていく。人は誰でも同じではないし、移動の環境も、恐らく事業者によって日本の場合、違うわけですよね。だけど、それをつなごうとするハードでもソフトでも、そこに向かっていくかどうかという、その姿勢をこの 2020 大会以降に、さらに事業者、そして小池都知事にも要請したいし、いろいろな意味でみんなが一緒にやっていく。ここがないと、やっぱりつながらない。
違ったままでもいいんです。そして、事業者がそれぞれ。だけど、つなげようよというのは、ひょっとすると人的なサポートかもしれませんし、あるいは情報のことかもしれませんし。そういうものを、皆さんが理解をする。困難な課題は山のようにあるかもしれないけど、そうあることによって少しずつバリアを外していく。そこに向かうというのが、この移動の社会においてもあるのではないかというふうに思います。
それでは最初のセッション、私たちの時間、これで時間が来ましたので、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会（眞鍋かをり氏）】
髙橋さん、そしてパネリストの皆さま、どうもありがとうございました。お席へのご移動をお願いします。
それでは次のパネルディスカッションの準備を行います。皆さま、5 分少々の間、

しばらくお待ちください。

（音楽）

【司会（眞鍋かをり氏）】
今、流れてまいりましたこちらの曲は、先ほど小池知事からもご紹介がありましたが、懇談会のメンバーでいらっしゃいます葉加瀬太郎さんがパラ応援大使として、パラスポーツの振興とバリアフリー推進のために作られた楽曲です。曲のタイトルは『Legacy』です。次の準備が整うまで、しばしお聴きなってお待ちください。

【萩本欽一氏】
暇なもんで、出てきただけです。
暇なもんで、もう一人、出します。中畑さんです。

【中畑清氏】
暇なもんで、水、飲んでました。

【萩本欽一氏】
喉の渇いた方、いますか。なんか、飲みたい方。ああ、そうですか。以上です。
（会場から笑い声）

【司会（眞鍋かをり氏）】
準備が整いましたので、二つ目のテーマを始めたいと思います。続いてのテーマは『心のバリアフリーを広めるために』です。パネリストをご紹介いたします。
東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター准教授、星加良司さん。
俳優の風間俊介さん。
東京都「心のバリアフリー」好事例企業である、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社経営企画部次長、倉田秀道さん。
同じく、東京都「心のバリアフリー」好事例企業である、全日本空輸株式会社 CE マネジメント室 CS 推進部担当部長、小島永士さん。
そして陸上競技の選手として、2004 年アテネ大会、2012 年ロンドン大会に出場された、パラアスリートの花岡伸和さん。
そしてファシリテーターは、東洋大学人間科学総合研究所客員研究員の川内美彦さんです。よろしくお願いします。

【川内美彦氏】
二つ目のセッションは、『心のバリアフリーを広めるために』というお題で、これは非常に難しいお題を与えられたなと思っていますので、まずは星加さんの基調報告

からお願いしたいと思います。星加さん、お願いします。

【星加良司氏】

ご紹介いただきました星加と申します。よろしくお願いいたします。

私のほうからは、このパラリンピックっていうイベントっていうのは、もちろん、いろんな意義があると思いますし、さまざまな成功イメージというものがあり得ると思うんですけれども、あくまでも私のほうからは心のバリアフリーという観点から見たときに、実はこのパラリンピックっていうイベントはかなり危ない部分を持っているというお話をしたいと思います。少なくとも、かなり気を付けてポイント押さえて、このパラリンピックっていうイベントをわれわれが受け止めていかないと、心のバリアフリーの観点からは少し逆行する可能性が出てくるという話をしたいと思いますので、ぜひ、問題提起として、皆さんと一緒に考えていければというふうに思っています。

例えば今年の9月には、もうパラリンピックが開催されて、都内の小学校とか中学校ではパラリンピックの競技を観戦に行くというようなことが大々的に行われるわけですけれども、その際に、例えばある中学校では競技を見た後の感想として、すごく感動したとか、あるいは、すごく前向きに明るくやってるのがすごいと思ったとか、あるいは、自分も頑張らなきゃいけないと思った、みたいな感想が出てきて、きらきらした目で、みんな、帰り道、楽しそうにしているという学校があったとしましょう。

他方に、なんかちょっともやもやした顔をして、考え込んでしまうような表情をして、なんでよく考えてみるとパラリンピックってオリンピックと別に行われてるんだろうとか、あるいは、なんか分からないけど、もやもやして、あんまり楽しめなかったとか、あるいは、あそこにはすごく輝いてた障害者がいたけれども、自分のクラスには障害のある人いないな、なんでだろうっていうふうに考え込んじゃったりですね、そういう反応をする中学校があったとします。

一見、Aの最初の中学校のほうが、すごく楽しくて、みんな盛り上がって帰っているので、パラリンピックっていうものを良い形で受け止めたというふうに思いがちですし、多分、引率している先生の立場になったら、こっちのほうがハッピーのような気がするんですけれど、恐らく、心のバリアフリーの観点から考えると、最初のほうの中学校はほぼ失敗だと思います。むしろ二つ目の、もやもやして帰る中学校のほうが、かなり1歩、2歩、前進してるかなというふうに思います。それがどういう理由なのかっていうのを、この後お話ししたいと思います。

心のバリアフリーって、そもそも何なのかっていうことなんですけれど、実はこれ、国がちゃんと示してくれています。常に国が正しいわけじゃないんですけれど、ここでは結構いいこと言ってるので、ちょっと参照してみたいと思うんですけれど、政府が『ユニバーサルデザイン2020行動計画』っていう文章を出しています。これは3年前にできているんですが、その中で、共生社会を実現するためには心のバリアフリーっていうのが非常に重要だという位置付けを行った上で、心のバリアフリーっていうのは三つのポイントを押さえた理解啓発のことだというふうに指摘しています。

一つ目が障害の社会モデルの理解。多分、あんまり耳なじみのない方、多いと思うので、この後、ご説明します。二つ目として、障害者に対して差別をしないこと。あるいは合理的配慮を提供すること。これは法律で決まっている話ですね。これをちゃんと徹底しましょう。三つ目として、先ほど来、出ているコミュニケーションであるとか、あるいは共感力、想像力っていうものを働かせましょうっていうことが書かれています。この二つ目、三つ目についてもちゃんと説明したいんですけれど、きょうは一つ目に絞ってお話をしたいと思います。

ちょっと難しいというか、分かりづらい話に聞こえるかもしれないんですけれど、障害の社会モデルっていう考え方は、実はこれ、学術用語でして、東京大学でも、これ、授業で教えてます。きょうは、東大で半年でやる授業を１分で話したいと思いますので、ぜひ、皆さん、お得感を持ってお聞きいただければと思うんですが、これ、社会モデルっていうのが、新しく目指していく考え方なんですけど、その前に障害の個人モデルとか医学モデルって呼ばれる考え方があります。これ、何かっていうと、障害者はさまざまな場面で困り事を経験することがある。これは先ほど来、出ている話ですけれど。それはなんでなのかと。なんで障害者って困るんだろうって考えるときに、それはまず体のどっかにうまく動かない所があるからだよね、目が見えないとか、足が動かないとか、そういう身体、体の不具合があるから困るんだよねっていうふうに考えて、そこから思考を出発させる考え方を、全て個人モデルとか医学モデルというふうに呼びます。もちろん体が悪いから困ってるんだよねって考えたとしても、その人を放っとくのは気の毒だから手助けしましょうっていうふうになる人も当然います。でも、まず出発点として、原因、困ってる原因が、その個人、その人自身の中にある。機能障害、どっかが動かないっていうことが原因となっているって考えるのが個人モデルです。

これは駄目なので、転換しましょうっていうのが社会モデルっていう考え方です。これは何かというと、社会の中にはいろんな人がいます。これはみんな知ってますね。今、多様性、ダイバーシティーってこともいわれますけれど、いろんな違いがある人がいることは、みんな知ってるはずなんですね。

ところが、われわれの社会っていうのは、なぜか多数派、マジョリティーに合わせて、さまざまなものを設計、デザインしてしまっている。それは建物もそうですけれども、それだけじゃなくて、さまざまなルールとか制度とか働き方、働く時間なんかもそうかもしれませんね。そうしたあらゆるものが多数派の都合とか利便性を基準にしてつくられてしまっている。こうした社会のゆがみが、あるいは偏りが存在してるっていうことなんですよね。少数派がいることは、みんな最初から知っているんだけれども、なぜかそのことを忘れたかのように、多数派に合わせた社会をつくっちゃってる。この社会の偏りっていうものがあることが原因となって、その少数派の側っていうのは損をさせられている、割を食っていると考えるのが、障害の社会モデルという考え方です。

これに基づいて、これを出発点にして考えると、そういう偏りをつくってしまった社会っていうのは、そのままにしておくのはやっぱり良くないよねということで、そ

の偏りをできるところから変えていきましょうっていうムーブメントを、ここから起こしていこうっていうのが、この社会モデルの考え方ですね。

パラリンピックの話に戻りますけれども、パラリンピックって何を目指してるムーブメントなのかっていうと、実はこれ、国際パラリンピック委員会というところが四つの価値というものを示しています。その四つは、勇気と、強い意志と、インスピレーションと、公平、公平とか平等っていうもんですね。この四つが、パラリンピックが目指す価値だと言ってるんですけれど、このうちの最初の三つが結構、危ないと思っています。

なんで危ないのかっていうことなんですけど、端的に言って、勇気とか強い意志っていうのは、これはパラアスリートの中にある強い意志とか勇気っていうことですね。だから個人の中にある特徴です。さまざまな困難を個人の努力で乗り越えていきましょうっていうアプローチに、どうしてもパラリンピック、これはスポーツイベント一般にそうなんですけれど、やっぱり捉えられやすいというところがあります。

さらに注意しなきゃいけないのは、パラリンピックっていうのはすごく感動を生み出すコンテンツとして優れているっていわれてるんですね。感動のことをインスピレーションっていうふうに英語では言うんですが、インスピレーションをもたらしやすいコンテンツだといわれてます。なんでかっていうと、パラアスリートっていうのは障害、持ってます。機能障害を持ってます。体のどこかにうまく動かない所がある。これがパラアスリートの特徴ですが、それがあることによって、なんか苦難を経験してる。初めから困っている状態に置かれてるんだなっていうのが、見ている人たちにイメージされるわけですね。その苦難を個人の努力とか周りの支えで乗り越えて、克服して、最終的に成功を収めていく。パラリンピックに出ることそのものが成功だと思いますし、そこでさらに競技上、良い結果が得られれば、さらに成功の物語になっていく。

この、そもそも体のどこかが悪いっていうことが苦難だと思われること自体が、これ、個人モデルの考え方ですし、それを乗り越えるアプローチとして、アスリート自身の勇気とか強い意志っていうものに期待するっていうのも、これも個人モデル的な考え方です。ここではやっぱり社会の偏り、そもそも困らせているのは社会じゃないかっていう考え方がなかなか育ちにくいということがあります。

なので、さっきご紹介したパラリンピックの目指す価値のうちの四つ目の一番最後のところですね。この公平、平等、Equality っていう価値を、どうパラリンピックから学んでいくか。それを考え続ける文化っていうものを、この社会、東京に残していけるかっていうのが極めて重要だと思います。そういう視点で見てみると、スポーツ、とりわけパラスポーツっていうのは、さまざまなヒントにあふれているともいえます。例えば、さまざまな特徴、違いのある人たちが、同じ競技に参加するためのルールとか、レギュレーションとか、あるいはそのルールがちゃんと守られてるかっていうことを、第三者が判定するレフェリングとか。こういうもの、スポーツには常に組み込まれているわけですね。こういう工夫は、さまざまな形でなされている。その結果、公平な競争を可能にするということがなされています。

こういうことを、もちろんパラスポーツという場面だけではなくて、われわれの社会生活、日常生活、自分自身の学校、企業、街というものに置き換えてみたときに、じゃあ、どんなルールを作れば、どんなレギュレーションを設ければ、公平な状況で、環境で、障害のある人もない人も参加できるのかということを考え続けていく。そのきっかけとしてパラリンピックというものを位置付けるということがなされることによって、この社会モデルへの転換に少し近づいていくことになるのかなというふうに思っています。この点が非常に重要かなというのが、私からの問題提起です。以上です。

【川内美彦氏】
星加さん、ありがとうございました。東大の授業を無料で聞かせていただいて、本当にありがとうございました。
では、次に2件、企業の取組というのを紹介したいと思います。まずは倉田さんのほうからお願いします。

【倉田秀道氏】
皆さん、こんにちは。あいおいニッセイ同和損害保険の倉田と申します。きょう、私、三つのことを、お伝えをしたいなと思っております。まず一つ、画面にあるとおり、取組は「本物か」、いうことです。心のバリアフリーを当たり前のようにしたい。みんなでそうしていきましょう。これがメッセージの一つでございます。
社会的な背景を復習の意味で、ちょっと見ていただきたいのですが、1964年当初と、2020年、何が違うのかということ。日本全体が全然、違ってますね。経済的な活動の背景からすると、働き方改革が叫ばれ、共生社会とか、ダイバーシティー、インクルージョン、こういった社会に、今、変わりつつあります。高齢化も30パーセントを超えて40パーセント近くなっている。今こそ、心のバリアフリーを浸透させる時ではないのかなと思います。このタイミングを逃すと、なかなか難しくなってくるんじゃないかな、そんな気がしております。
個人的な見解も含めて、ここで二つ目のメッセージでございます。「国際スタンダード」ということでございます。いろいろな先生方も研究され深められておられますけども、日本のバリアフリーとか、ダイバーシティー、インクルージョン、国際的に見たらどうなんでしょうか。私は個人的に3年前まで大学のスキー部の監督をやっておりまして、全日本のコーチもしておりましたので、海外遠征が多かったんです。ヨーロッパ、北欧方面へ行くと、現地では、部活はなく、クラブチーム。特別支援学校がほぼなく、幼少の頃から障害を持ってる子も、持ってない子も一緒に遊び、スポーツをし、生活をしている。私どもが行っている選手の強化、このことについてもフィンランド、ウクライナ、ロシア、いろいろな国々のオリパラトップチームが一緒に合宿をしていました。このようなところが目に付きました。ヨーロッパでは、心のバリアフリーは本当に当たり前だったんだなというのを実感しました。
その写真がこちらでございまして、一例でございます。フィンランドにスキートン

ネルというノルディックスキーのトンネルがあります。ここで合宿をしてる下の黒い服を着てるのが私でございます。この上の写真、ロシアのクロスカントリースキーチームのワールドカップチームが合宿していて、オリとパラ、両方一緒に練習していました。日本も一緒にやろうよ、ということはいわれていますが、できてる競技団体と、できてない競技団体が、まだまだあり、この点に差があるように感じています。そのようなことを自分で経験して、いろいろな気付きを得ました。僕が大学で指導してるときは、パラのスキー選手も大学に入学をしてもらって、体育会でパラの選手も一緒に活動しようということをやりました。こちらの写真がそうなんですが、これがパラバリ懇のメンバーでもあります村岡桃佳選手でございます。早稲田では彼女がこういった選手の第1期と言っても過言ではない選手なのです。

こういった知見を得て、混ざり合う社会を目指したいなと思って活動していました。

次に、野菜ジュースを見てみましょう。このように砕いて、一つになって、皆さん、飲んでいます。ところが、「混ざり合う社会」はこうじゃないんじゃないかなって思います。野菜スティック。かめば、かんだ感じが、みんな感触が違う。味も違う。一つのステージでいろんな味、感触が。こういうことが混ざり合う社会じゃないのかなということを感じています。

今度は会社の活動についてお話します。障害者雇用がだいぶ進んでおりまして、いろいろな方々が一緒に働く環境をつくってます。その中で、社内研修とか、職場で、みんな討議し合うことは当然実施しています。一方で障害者スポーツ支援を、かなりやっておりまして、アスリート雇用も進展しております。選手と社員の当事者、みんなで意識を変えていこう、スポーツを通じて意識を変えていこうと。そして、その上で、特にパラアスリートの活躍の場を、もっと、もっと見いだしていこうよ、ということをやっております。

ここで、三つ目のメッセージでございます。「地域」。私ども障害者スポーツ支援を行っていますが、地域と連携しないと深まりがないなということを非常に感じています。東京都、あるいは東京都の中でも区・市、及び全国の自治体さんと連携しまして、パラアスリートと、私どもの社員と、地域住民の皆さんと、あらゆる交流活動をしてきました。特に、その中でも気が付いたのが、パラアスリートがそういう場所に出ていくということは、コミュニケーション能力も高まり、選手たちが社会で活躍する場が、また一つできたということです。このことを実感しているところでございます。仕事を職場の机でするだけではなく、社会にどんどん出ていく。こういうことも仕事の一貫で活動しようよということをやっております。

そういった意味で、2020が終わった後も持続可能にする活動が求められています。取組を継続していくためには、自治体さんと一緒にやっていく、こういう活動がマストじゃないかなと思っております。少しだけ、写真でご案内しますのでご覧ください。

例えば、弊社では社員による大会応援を行っています。東京、千葉、神奈川、埼玉、首都圏だけでも多くの大会があります。ここでみんなに来てもらう。私どもの社員も観戦をしていますが、これだけではなくて、いろいろな地方の大会も、もっと、もっと応援を行って、応援の輪を広げていけたらいいのはないかということです。実は、

私どもは海外でも現地法人のメンバーとともに同じような活動をし始めています。今年度はロンドン、バンコクで実施しました。長くなるといけませんので、この辺で終わりにいたします。ありがとうございました。

【川内美彦氏】
ありがとうございました。じゃあ、続いて小島さんのほうからお願いします。

【小島永士氏】
ＡＮＡの小島でございます。よろしくお願いします。
実は、ＡＮＡは5年前の2015年に、オリンピック・パラリンピックのオフィシャルエアラインパートナーになりました。世界からたくさんのお客さんが来られるよねっていうことで、そのときに経営陣のメッセージとしてあったのが、全ての人に優しい空を実現しようと。そのための経営戦略を作ろうじゃないかと。こんな話になったわけです。
今、ＡＮＡは2本の柱で全ての人に優しい空の実現に向けて活動してます。一つは空港だとか、あるいは機内だとかの施設設備。こういったところのバリアフリー対応、ハードの対応をしています。それともう一つ、今日のテーマになってますけれど、ハートということで、人的施策だったり、あるいは接遇に向けた教育訓練だったり、こういったところをしっかりやっていこうというハート面の取組。この2本の柱でユニバーサルサービスというのを推進しております。
少し、ＡＮＡのユニバーサルサービスに関する考え方を、イメージ図でご紹介をしたいと思います。三角形がいくつか並んでおりますけれど、いずれの三角形も横軸の部分をハード・施設設備に対するもの、そして縦軸の部分をハートに関する力の入れ度合いということで見ていただく中で、三角形の大きさと形に注目しながら話を進めたいと思います。
これまでＡＮＡはどこに向いていたかというと、収入も、お客さまの数も非常に多いビジネスパーソン、ここに目が向いていたのかなと思ってます。もちろんお身体が不自由なお客さまだとか、高齢のお客さまだとか、ファミリーに対しても対応はしていましたが、明らかに別の目でやっていたというのがこれまでだと思っています。ですので、三角形の形が、ビジネスパーソンはちゃんと二等辺三角形になっていますが、それ以外のカテゴリーのお客さまは、なかなかそうなっていない。これがこれまでだというふうに思っています。
これからどうあるべきなのかということですが、やはりビジネスパーソンはこれまでどおり、非常に重要なお客さまだと思っています。ただし、お客さまをカテゴライズするということではなくて、一つの大きな三角形の中に、障害をお持ちのお客さまも、高齢のお客さまも、ファミリーも、妊婦も入って、一つの目で見ていく。こうしたことによって、全ての人に優しい空を届けながら、われわれ企業の価値や企業のブランドを高めていこうと。こういうところを目的として、ユニバーサルサービスの推進を、目下、力を入れているというところでございます。

少し具体的な事例を、ご紹介をしたいと思います。ハードの施策の事例になりますけれど、われわれＡＮＡではサービスを設計する際に心掛けていることがあります。それはどういうことかというと、お客さまとの直接的な接点を考えるだけではなくて、旅の始まりから旅の終わりまで、体験をトータルに捉えて、体験価値を提供していく。こういう考え方が重要なんじゃないかと思っております。これはお身体が不自由なお客さまについても同様だと思っておりまして、まさに左上の所にありますとおり、ご旅行前のご予約から始まって、空港に着いて、搭乗手続きをされて、機内に入って、目的地に着くまで、一連の体験価値、こういったところをしっかり提供していこうと、こういう考え方でユニバーサルサービス、ハードの部分の推進をしております。

非常にお金がかかる話なんですが、これはシステムだとか、あるいは施設設備のバリアフリー化は、必ずしも障害者に恩恵を与えるだけだとは思っておりません。例えばローカウンターだとか、ワイドの改札機だとか、段差がない搭乗橋だとか、もちろん車いすのお客さまにも十分、恩恵を与えられると思いますが、一方では高齢者だとか、ベビーカーを使ってるお母さんだとか、そういった方にも恩恵を与えると思っていますし、あるいは音声認識をするような装置だとか、コミュニケーションアプリみたいなものは、聴覚障害者だけではなくて、グローバルのお客さまにも役に立つと、こういうふうに思っておりますので、いろいろな面でユニバーサルサービスを推進することによって、全てのお客さまにメリットを与えていく。それこそがオリンピック・パラリンピックに向けたレガシーになるんじゃないかと、こういうふうに思っております。

次がハートの部分です。前のページでハードのお話をいたしましたけれど、いくらハードを整えたとしても、接遇に当たる社員一人一人の気持ちがこもっていないと、まさに仏を作って魂入れずと、こういうことになっちゃうのかなというふうに思っております。ユニバーサルサービスを、ＡＮＡの文化にして、社員一人一人のＤＮＡレベルまでどのように落とし込むのかということが非常に大事だというふうに思ってまして、心のバリアフリー、あるいはマインド醸成みたいなところに、今非常に、力を注いでおります。

右上の写真が、車いすのご利用体験だとか、あるいは白内障の疑似体験みたいなところをしっかりやろうということで、社長以下の全役職員を対象に、今、教育をしていたりします。また特別支援学校に出張しての授業や、あるいは本物の飛行機やシミュレーターを使って搭乗体験会をするだとか、こんなこともやっております。あとは社内のセミナーになりますけど、障害者の施設であるとか、あるいは高齢者の施設、あるいは社内の施設に出向いて、障害者あるいは高齢者と直接、交流しながら学び取る。こういうようなセミナーも開催をしておりまして、年間 400 名強の教育を実践しているというところです。

最後に、こういったところに手を挙げてくれる社員は非常に意識がある社員なのですが、問題は、こういうところに手を挙げない社員。こういった人たちにどう振り向かせるのかということが、非常に大事だと思っております。そこで何をしているかというと、まさに今、ご紹介したような、こういったハート施策の取組自体を、人事の

諸施策と連動する中で、例えば昇格昇給要件にするなどの工夫をしています。こんなこともやりながら、ハートの戦略というのを進めているということでございます。以上でございます。

【川内美彦氏】
ありがとうございました。では、時間も押していますので、次のパラアスリートの立場から、花岡さん、お願いします。

【花岡伸和氏】
花岡です。もう、しゃべっちゃ駄目って言われるのかなと思いましたけど、ありがとうございます。

【川内美彦氏】
これだけの人が集まってますから、ご自由にとは言いませんが、言いたいことはおっしゃってください。

【花岡伸和氏】
3分で頑張ります。花岡です。よろしくお願いします。
僕のほうからは、まず心のバリアーって何やというところから、お話ししたいなと思います。僕の私的な考えではあるんですけど、スタートはやっぱりカテゴライズですよね。小島様の、カテゴライズしないっておっしゃってましたけれども、例えば障害者である、健常者である、LGBTQである、外国人である、いろんなカテゴライズがスタートだと思います。
そのカテゴライズまではいいんですけど、そのカテゴリーに対して勝手なラベルを貼る。レッテルですよね。例えば障害者だったら、何かができなくてかわいそうであったりとか、外国人だったら、あの国の人やからちょっと嫌やなとか、いろんなレッテルを勝手に貼ってしまうことだと思うんですよね。それが負のレッテルの場合、スティグマっていいます。意味は烙印ですね。負のスティグマが多数派から少数派に向けられたときは、ものすごく大きな力になるんですよね。
それが、恐らく、生きづらさっていうものでもあると思います。その生きづらさっていうのは、実は障害者、切り取って見てみれば、何かができないからかわいそうっていう考え方は、実は勝手に思われていることであって、当事者はそうは思ってないわけですよね。かつてヘレン・ケラーは、障害は不便だけで不幸じゃないと言ってます。僕もいろんな小学校に行ってこういう話をしたりするんですけど、じゃあ、そういうスティグマってどういう年齢からつくられてるのか。小学校1年生でも、こうやって元気に話してる僕を目の前にしても、なお、歩けない僕のことをかわいそうだと、やっぱり言うんですね。だんだん年齢が上がっていくと、忖度して言わなくなるんですけれども、小学校1年生ぐらいだと忖度なしにかわいそうだって言ってくるんですね。

あと、そのスティグマがどこからやってくるかっていうと、やはり伝承だと思うんです。一番、親だと思うんですよね。家庭で受け継がれてしまうものだと、僕は考えてます。じゃあ、その受け継がれてしまった人が、そのスティグマを拭うのに、どれぐらい時間を要したり、努力が必要なのかっていうと、今、早稲田大学の学生さん数人と、パラのアスリートと、何人かで合宿を年1回やってるんですね。その中である1人の女子学生が、そのカテゴライズしてしまう自分と、レッテルを貼ってしまう自分に苦しみだしたんですね。それについてずっと考えて、今、現在、たどり着いてる答えが、世界はカラフルで、グラデーションでできているっていうところなんです。

でも、そこに行き着くのに3年かかってるんですね。やはり一度つくられてしまったものが変わるっていうのは、時間が非常にかかるなと感じてます。でも、そのグラデーションであるっていうことに気付いた女の子が親になったときは、恐らく子供にも同じことを伝えると思うんですね。この心のバリアを拭い去っていく、変えていくっていうのは、非常にやはり時間がかかる。世代交代っていうところまで見ていかなきゃ、もしかしたらいけないんじゃないかなというふうなことは考えています。

自分自身も元気で動ける間は、オリパラ教育に乗っかって、いろんな学校に行かせていただきたいと思うんですけれども、やはりパラリンピックが終わったらなくなってしまうんじゃないかなっていうような心配もありますので、ぜひ、東京都さん含め、いろんな自治体で行われているパラリンピック教育が継続されてほしい。きのうも僕、文京区の小学校行って、50枚ぐらいサイン書いたんですけれども、やはり車いすに乗ってるっていうところを飛び越えて、僕のキャラクターを好きになってくれる、そのパーソナリティーを見てもらえるっていう、そういう時間を子供たちと共有したいなと考えております。以上になります。

【川内美彦氏】

どうもありがとうございます。では最後に、皆さん、ご存じの風間さんのほうから。

【風間俊介氏】

風間俊介です。よろしくお願いします。本当に皆さんがさまざまなお話をして、僕が話したいなと思っていたようなお話っていうのもいくつか出ていたので、もうある種、僕が語ることはないのかな、なんて思うような部分もあるんですけれども。

花岡さんや二條さんがおっしゃったように、本当に障害がある人の助けになりたいという気持ち自体はものすごく素晴らしいことなんですけど、その考えって実は落とし穴があるのではないかなと、僕自身も思っております。障害がある人の助けになりたいではなくて、困っている人がいたら助ける。この大きな枠組みで挑むことっていうのが、フラットな考えなのではないか。障害がある人だから助けるっていうふうに考えること自体が、ある種一線を引いてしまっている。バリアになってしまうのではないかなと思っております。

なので、困っている人を助けることが、ひいては障害がある人を助けることになるのではないかなと思います。東京という街は、どうしても人が多く、そして土地も狭

く、エレベーターが設置してあったとしても、そのエレベーターに乗れる人数が限られていたりします。車いすの方々、これからパラリンピックがやってきて、多くの人が列を成している時っていうのは、もしかしたらその途中にベビーカーを押しているお母さんがいるかもしれない。確かに優先順位っていったら、どれかに優先順位を付けるというのは良くないのかもしれないけど、僕の中では車いすの方々を優先的に乗せてあげたいなと思います。そういう場合はそこにいるベビーカーのお母さんに声を掛けて、そのベビーカーを持たせてくれませんか、ということがひいては車いすの方々を先に乗せることになるのではと思うと、障害がある人を助ければ、それがバリアフリーなのかといったら、そうではなくて、多くの人を助けることだと思っております。

そして、心のバリアフリーという意味でいうと、多くの人たちが、障害がある人たちは健やかで懸命に困難に戦っている人々というイメージを持ってしまっているということがちょっと問題なのかなあとは思います。それ自身は、本当にそういう方もいらっしゃいますし、でも本当に人間っていろんな人がいるので、そうでない人もいるんです。もちろん、障害がある人の中で犯罪を犯してしまう方もいらっしゃいますし、もしかしたら仲良くなれない、自分とは相いれない考えを持っている人もいるかもしれない。でも、そういう人を認識することというのが一番、僕は大事なことだと思っています。

僕は今、福祉のお仕事を長くやらせていただいて、多くの障害がある人たちと仲良くなってきたんですけれども、大げんかみたいなことを今のところしたことがありません。この人とは仲良くなれない、この人のことは嫌いだと思ったことがありません。でも、それ自体が少し僕自身寂しく思っておりまして、そしてどこか自分の中で自問自答、本当に正しく見れているのかなと思う部分であります。なので、僕の目標は、いつか障害がある人と大げんかをして、もしかして少し絶交みたいなことになって、そして再び会ったときにまた分かり合える、そんな経験を僕がする機会があったら、本当に心のバリアフリーというのを手に入れたんじゃないかという自負が生まれる瞬間なのかなあと思っております。以上です。

【川内美彦氏】

ありがとうございました。さっきの風間さんの発言が始まった直後に、あと5分という表示が出ていまして、まとめようがないので、私は私でちょっとまとめてきたものをお話ししたいと思います。

心のバリアフリーというのは何かということです。

ユニバーサルデザイン2020行動計画というのに、全ての人がお互いの人権や尊厳を大切にし、支え合う共生社会、というふうに言っています。つまり、共生社会というのが人権や尊厳を大事にするんだということを言っているわけです。その実現のためには、心のバリアフリーとユニバーサルデザインのまちづくりという二つが掲げられています。つまり、心のバリアフリーというのは、人権や尊厳を大切にというのが前提にあるということです。

私のほうで、700 人ほどにアンケートを採ったんですが、心のバリアフリーから連想する言葉として、優しさ、思いやりを選択した人が非常に多くて、権利、尊厳を選択した人というのは非常に少ないです。つまり、心のバリアフリーからは、人々は優しさ、思いやりを連想していて、人権や尊厳を連想していないんです。つまり、人権や尊厳を言うのに、心のバリアフリーというのはあまり適切な言葉ではないということです。

実は、例えば私が障害のある方が大嫌いな商店主で、障害のある方には店に来てもらいたくないというふうに思っていたとしても、もしお店に入って買い物をするということが障害のある人にとって権利であるならば、その商店主は拒否できないんです。だけど、思いやりがあれば、商店主は受け入れるわけです。つまり、権利というのが優しさや思いやりに左右されるならば、実現するところと実現しないところが起こってくるということで、権利や尊厳を思いやりで考えてはならないということです。

つまり、心のバリアフリーという言葉で人権や尊厳を目指そうということ自体が、実は不適切ではないかというふうに考えています。優しさや思いやりというのは、もちろん人間として必要なことですけれども、それは優しさや思いやりで平等な社会参加ができるのではなくて、平等な社会参加という基盤がある上で、どうやってその質を高めるかというところで優しさや思いやりということが必要になる、そのことを私たちは間違えてはいけないのではないかというふうに思っています。

ばっとまとめますと、心のバリアフリーという言葉が、優しさや思いやりに流れてしまうという傾向がある。それから、優しさや思いやりと人権や尊厳というのは混同してはならないということで、本来の目的、それが心のバリアフリーという言葉が適切だとは思いませんけれども、日本ではそれを心のバリアフリーと呼んでいる。だったらそれは、お互いの人権や尊厳を大切にし、支え合う共生社会を目指すことなんだということを私たちは確認すべきであって、決してそれが短絡的に優しさや思いやりのことなんだというふうに思ってはならないのではないかというふうに思います。

ということで、もう時間が来てしまいましたので、あとは全体のディスカッションの中でやっていただければということで、ファシリテーターの仕事を放棄して、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会（眞鍋かをり氏）】

ありがとうございました。以上で『心のバリアフリーを広めるために』についてのパネルディスカッションは終了となります。皆さま、ありがとうございました。それではお席のご移動をお願いします。

ここからなんですが、次は全体のディスカッションに移らせていただきます。本日ご出席の懇談会メンバー、皆さま全員に参加していただいて、本日のテーマに関する意見交換を行いたいと思います。テーマ 1 のファシリテーターをしていただいた髙橋先生と一緒に進めていきたいと思います。髙橋さん、前のほうへよろしくお願いします。よろしくお願いします。

【髙橋儀平氏】
よろしくお願いいたします。

【司会（眞鍋かをり氏）】
本日のテーマ、一つ目が円滑な移動についてということで、二つ目が心のバリアフリーについてだったんですけれども、皆さまにも意見を伺っていきたいと思います。挙手制です。はい、それでは皆さんの意見を挙手でお願いします。

【髙橋儀平氏】
きょう時間の関係があるので、会場の皆さんにはすいませんけれども、後ほどアンケート等で回答いただくこととしまして、パラバリ懇の皆さんにお願いをしたいと思います。

【司会（眞鍋かをり氏）】
それではどなたから。

【髙橋儀平氏】
いかがでしょうか、大使の皆さん、はい。

【大黒摩季氏】
初めましてになりますが、大黒摩季と申します。どうぞよろしくお願いします。私はこの場に初めて来たんですけれども、実を言うとうちの母が重度の障害者で、脳出血からの左上下肢全廃、そしてステージ４のがん、もうてんこ盛りでバリューセットになっています。そんな彼女とつい最近まで、お正月も含めて、一人で介護していて感じたことを言わせていただきたいんですが。
今ここにいらっしゃる障害をお持ちの方とか、いろいろいらっしゃる方自体が、もう私にとっては崇高なポジティブな方々で、うちの母のように、もういろんなところが折れちゃって、例えばスーパーに行けばレジが高い、お金を払おうと思ったのにレジの位置が高い、それからお金をお姉ちゃんと一緒に下ろして、孫に買ってあげようと思ったら、ＡＴＭが本当に高い、そんなことを毎日、母と一緒にへこんでいるので、そこをくみ取ってあげてほしいなと思いました。強く挑みながら戦っていらっしゃる方々は、こういうところに出て発言ができます。だけど、いろんなところで折れちゃって、家に閉じこもってばかりしかいられない、ポット一つ、ウオーターサーバーのお湯を出すだけでもどきどきしちゃうような人たちを、どうか置き去りにしないで、そこの方たち、できれば私たちの意見などよりも、そこにいらっしゃる、その毎日と戦っていらっしゃる方のご意見をどうかたくさん吸い上げて。
私はコンサートとかもやっているんですが、母が車いすになってから、いかに動線が運ぶ人たちの動線かと。見る席が、通す人たちの事情だと。あるときから自分が切り盛りできるコンサート会場は、段を付けて、みんなで乗っけて、誰に立たれても大

黒摩季がきっちり見えるようにするようになりました。そして動線も、どうしてスロープは一番、時間がかかる人たちなのに外側についていて、ぐるぐる回されて。それのお金があるんだったら、真正面につけてみんなと一緒に入れるように、そして席に行くときのエレベーターも、例えば武道館だったら真裏だったり。そして見る席は、一番スタンドの奥で、（前に）立たれたら何も見えないとか、そういうところで、もう二度とコンサートに行くまいと誓ってしまった人たちとか、そういう人たちの、私の母の小さな声をこういうところでくみ取っていただければということだけはお伝えしたいと思いました。もう挑んでいる方は、たくさんのバリアを越えていけます。今のバリアの中で、その中で小さくおびえている人たちの声をどうか聞いてやってほしいです。

私は母と一緒に、一緒に車いすで過ごしました。気持ちが分かりたくて。そうしたら、皆さんがああして、こうしてとやってくださっているものは素晴らしいことなんですが、そこに行く手前で、まずうちを出るところからスタートして、道路に水たまりがあるときに片手で自走している人たちは避けられないんです。その教育はきっと、先ほどもおっしゃっていましたけれど、親子関係だったり、うちはお父さんがパン屋さんで、小さいときから知的障害、身体障害の人たちと一緒にお仕事をしていました。使っているんではないんです。一緒に仕事をしてきたんです。という教育が私にあったから、バリアは現時点でありません、一つも。バリアという言葉も使いません。障害という言葉が嫌いです。母といると、彼女はたまたま病気でそういう現状になっただけで、ある意味、私も臓器が１個ありません。2 個ありません。体の中は。外にないけれど。だから、みんなで共存するときは、親戚とかきょうだいとか恋人とか、そういう気持ちでどうか、同じ目線で話を聞いてあげてもらっていいですかということを、初めて参加してこれでクビになっちゃうかもしれませんが、それだけはお伝えしたいと思いました。長々失礼いたしました。

【髙橋儀平氏】

はい、ありがとうございました。はい、お願いいたします。

【根木慎志氏】

パラ応援大使をさせていただいています車いすバスケットボールの根木慎志です。よろしくお願いします。まず、パネルディスカッションに出られた皆さん、お疲れさまでした。とても多様な方が来られて、多様な意見があったので、とても興味深かったです。

僕のほうからは、今回のテーマの二つに分けて話を、一つかな、話をさせてもらうと、まずパラパワーリフティングの三浦さんが話をしていた、テクノロジーが進むことによって、これからやっぱり今まで障害と思われていたものが障害でなくなってくるってどういうのかなというふうに思います。それは本当に楽しみです。さっき言った５Ｇの進化とか、いろんなものが本当にあると思います。それで本当に多くのものが、それこそ車いすもどうなんですかね、別に歩かなくても、なんか宙に浮くような

時代が来るかもしれません。それも楽しみにしていますが。本当に僕らの想像を超えるようなテクノロジーの進化というのがあるのかなあと思うので、それは本当にみんなで考えながら進めていくことを楽しみにしています。

でも、後半の話の中で、心のバリアフリーというのは、これはもっと追い続けることが必要だと思っています。その中で、星加先生がお話しされていた、本当に障害って何なんだろうと、そもそもで、社会モデルというのを僕も本当に思っています。パラリンピック危ないというのも、僕もパラ選手でありながら、危ないというか、パラリンピックの価値というのをもうちょっと知らせることが必要なのかなあと思っています。パラリンピックの究極のゴールというのはＩＰＣが定めていて、それはインクルーシブな社会の創出なんです。だから、多様な社会をつくるということを最も目指していて、その中の四つのバリューというものがあるということをもっともっと知らせることが僕は必要なのかなあというふうに思っています。

僕もEquality、公平性というところが、その中の四つのバリューで最も進めていきたいところなんです。パラアスリートも今、多くの方、先ほどの花岡さんも学校の講演に行かれています。僕も実は30年間で、35年間ぐらいかな、もう3万6000校の学校に行っています。日本の10校の1校に行っているんですけど。ちょっと行き過ぎかもしれませんが、今年間200校ぐらいの学校に行かせてもらっています。その中で伝えているのは、違い、インクルーシブということを伝えていて、それを僕の場合はパラアスリートなので、パラリンピックの競技を通じて違いって何なんだろう、障害って何なんだろうということを伝えています。もっと分かりやすい言葉で言うと、小学校1年生にも伝える必要があるので、それは友達になろうねということなんです。友達って、それこそいろんな違いがあります。友達だからといって、考え方が一緒かどうか分からないです。本当に先ほど風間さんも言われたけんかもします、友達だから。風間さんとけんかはちょっと、なかなかできないかなあと思うんですが、でもやってみたいなあと思います。

このパラバリ懇のメンバーも、本当に多様な人たちがいっぱいいます。なので、やっぱり言ってもこの人の考え方にはなかなか寄り添えないなあとかって、なるほどね、でも違うようねっていうこととかいっぱいあると思います。僕、テリーさんとかなり合うところがいっぱいあるかなと思うんですけれども、この懇談会のメンバーのように多様な、社会はもともと多様なので、いろんな考え方があると思います。あって当然だし、けんかもすることがあるかもしれません。なので、パラスポーツを通じてバリアフリーとかインクルーシブとか、違いを認めるということができたらなあと思うし、個人的には、懇談会メンバーに提案なんですけども、ぜひみんなでボッチャでもしながら、ガチになってけんかになるかならないかぐらいで、そんな感じでテリーさんにバトンタッチします。よろしくお願いします。

【テリー伊藤氏】

本当に障害者の問題の一番って、僕は距離感だと思うんです。先日、僕はこのフォーラムの会場の下でボッチャやらせてもらったんです。根木さんなんかとやったんで

すけど。それまで実は根木さんとは敬語でしゃべっていたんです。でも、ボッチャやっていると、「おまえ、なにドジっているんだよ」と。「ふざけんなよ」と。そういう話になると普通なんです。ですから、距離感って実は、同じ目標があって一緒にやるといいなあと。そうするともう、今、根木さん非常に真面目なことを言っていますけども、女の子、大好きなんです。だからそういう話も実は普通じゃないですか、今、言われた友達というのは。実は一緒に伴走しているんです、駒沢公園で、目の不自由なランナーの方と。すごく速いんです。僕いつも負けちゃっているんで、速く走り過ぎと文句、言っているんです。それもまた仲良くなれる一つの理由になるんで、ぜひ一緒の何か目標を持って、優しさを与えるとかじゃなくて、みんな仲間だから、そういう感じでやるといいんじゃないかと思いました。

【司会（眞鍋かをり氏）】
ありがとうございました。

【イルカ氏】
なんか自動的にマイクが来たんです。

【司会（眞鍋かをり氏）】
イルカさんも今回初のご参加ということで、ご意見お願いします。

【イルカ】
私、本当にきょうはいろいろ素晴らしいご意見を伺って、障害というものを私は昔から非常に自分の中で大きく捉えて生きてきたなと自分でも思っておりました。その障害者という言葉が、どうも自分の中ではしっくりこなくて、なぜなのということが、きょうとてもクリアになった気がいたしました。障害というのは、その人が持っているものが障害ではなくて、その人を囲んでいる社会に障害があるんだなというふうに自分の中で非常に感じることが多かったんです。それが間違っていなかったということ、そしてそのことに向かっていこうという人たちがたくさんいらっしゃるということが非常にうれしく思いました。

また、きょう具体的に一つだけお願いがあるんです。何かといいますと、先ほどやはり今の世の中というのはすごく多数の人がつくっている世の中であって、非常に社会の偏りがあるというご意見がございました。そういう中で、衣食住はみんなに平等でなくてはいけないのに、特に食ですね、私、1972 年からビーガンなんですけれども、どこへ行っても食事に大変、不便です。そして、最近、思っているのは、海外からいらした方が日本のレストランやあらゆるところへ行ってもう右往左往、ものすごく困っていらっしゃるんです。それを見まして、私、本当に人ごとではなくて。私も、ほとんどあまり外食するということができなくて。それはそれで構わないのですが、海外からいらした方は、特に観光でいらした方は、おそば屋さんに入っても、おそばは食べられるけど、このスープは何でできているんだと聞いても、英語で答えられるこ

ともなく、表示もなく、アレルギーがあったり、それから宗教的な問題があって、本当にもう深刻に食べられないんだという方は、自分が持ってきたパンしか食べてないという方も非常にいらっしゃいます。

ですので、私は一品でいいので、お野菜だけのものを何か用意していただけると、それがまた一つのビジネスチャンスにもつながりますよという言い方をして、いろんな食に関わっていらっしゃる皆さまにはいつもお願いしています。そういうささいな、そんなこと気にするんですか、ということを気にしなくてはやっぱりいけないんじゃないかということを自信を持って伝えていいかなというふうにきょうは思いまして、食関係の皆さまも、ぜひ困っていらっしゃる方のために、よろしくお願いいたします。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。このパリバラ懇にも食の関係者がいらっしゃいますが、どなたか今のイルカさんのご発言を受けて一言お願いいたします。

【野村祐介氏】

私、今イルカさんのビーガンの対応というのをメインにやっている、精進料理というお店をやっている観点からお話しさせていただきます。先ほど烙印だとか、マイノリティーな方々の話いっぱい出てきたと思うんです。僕自体は肉も魚も食べれる体ではあるので、やっぱり普通に生きてくると、100 人に 1 人ぐらいの方がビーガンなのかなというぐらいのイメージを皆さん持たれていると思うんです。ただ、100 人に 1 人ということは、東京に 12 万人、世界には 6000 万人以上の方がビーガンをやられている方がいらっしゃる。もちろん、ビーガンだけでなくても、先ほどもおっしゃっていましたけど何らかの宗教的な観点ですとか、体調、アレルギー、もしくは今であれば環境保護の観点、いろんなところで何かを抑えていらっしゃるというお客さまはすごくいらっしゃいます。このオリパラ 2020 年にインバウンドの多くのお客さまを日本にお迎えするにあたって、秋山さんもおっしゃっていましたが、日本の良さというのを食体験、気持ち、いろんなものを通して世界に発信していけたらという気持ちでやっております。

このパラ応援大使をやらせていただいて、僕は皆さまの前でしゃべるような仕事というのも普段はしませんし、学識経験者の方のような専門的な知識というのも本当に乏しいのですが、だからこそ本当にこのお話をいただいたとき、ストレートにではないんですが、何か自分ができることはないのかなと、そういう気持ちで受けてしまいました。ただ、いろんな皆さまのお話を伺っていて、その気持ちというのが先ほど皆さまおっしゃっていましたけれども、どこかおごっている気持ちがあったんじゃないのかなと。パラリンピックの競技を、予選を観戦させていただいていて、障害という言葉というのは適切じゃないんだなと。これは個性なんだなと。僕らにできないことを、どれだけ多くのことを、いわゆるパラアスリートの方たちができるのかということを見ていてつくづく、これは僕らが何かやってあげるという感覚自体が間違っていたなというふうに思いました。

きょうのお話を聞いて、ジェットコースターのように気持ちが上下してしまうんですけれども、いわゆるソフト面でのチェーンができているのかというのを稲垣さんもおっしゃっていましたけど、そういう話を聞くと、今度はまた何かやらなきゃいけないんじゃないのか、ソフトな気持ちを、優しさというものを出さなきゃいけないんじゃないのかなというふうにまた思ってみたり。でも最後に、やっぱり人権や尊厳というのは優しさには左右されてはいけないものだなということを聞いてみると本当にそうだなと心の底から思ってみたり、これに関わった皆さま、僕のような専門知識がないような人間は、意見を聞くたびに本当にそうだな、そうだなというふうにどんどん考え方が変わっていきます。

精進料理、仏教の教えもそうなんですが、仏様の教えというのは、本当に厳しい修行を耐え抜いて、菜食だけを貫いた潔白な人間のために仏の教えがあるのか、そうではなくて、それができないような状況、もしくは気持ちの弱い人間、心が折れてしまったというふうに先ほど大黒さんもおっしゃっていましたけれども、じゃあそういう人に対しては仏様のお気持ち、もしくはこの心のバリアフリー、優しさというものをどういうふうに出していけるのかなというのを、二転三転、考えさせていただきました。これも星加さんがおっしゃっていたと思いますが、パラリンピックというのは勇気とかそういう、ちょっと危険をはらんだものということではなく、パラリンピック、もしくは障害、バリアフリー、いろんな言葉に対して、みんながどういうふうに考えるかというきっかけを与え続けてくれるきっかけになれば一番いいんじゃないのかなというふうにきょうはお話を伺っていて思いました。すいません、話すのが苦手で、あまりまとまらなかったかもしれないですが、個人的にはそういうふうに考えさせていただきました。

【髙橋儀平氏】

ありがとうございました。もうお時間もなくなってきましたので、最後に観覧していただいた方にも意見をいただきたいと思うので、最初に挙手していただいたこちら、前列の方にご意見、頂戴したいと思います。よろしくお願いします。

【観覧者】

今まで私交通パターンとして、私車いすで障害者の者なんですけど、気付いたことは、京急とかＡＮＡさんとかのときは、ちゃんとすんなり仕事に行くときも行けるんですけども、ＪＲさんのほうが全然、待たされて、そこから 1 時間とか 1 時間半とか待たされてという現状で、今ようやく短縮して、ようやく 30 分ぐらいで乗っけてもらえるんですけど。それはどういうわけで乗っけてくれないのかなという感じですけど。それをちょっと聞きたいんですけど。

【髙橋儀平氏】

すいません、きょうはＪＲ関係者、いないですか。じゃあ猪狩さん、お願いします。

【猪狩ともか氏】
アイドルグループ仮面女子の猪狩ともかと申します。ＪＲ関係者ではないんですけれども、私が聞いた話によると、降りる駅に連絡を取って、この人、車いすに乗っている人が今、何番線の何号車に乗って、何番ドアに乗ってこの駅に降りますという連絡を取るのにすごく時間がかかるというのを聞いて、それで待たされているのかなというところがあるんですけど。でもそれにしては 30 分、1 時間は待たされ過ぎなのかなという印象があります。

【観覧者】
そのことを踏まえてなんですけど、ＪＲのほうに聞いてみたら、来るんだけどもスロープを持ってこないとか、もう今は人がいないから後からにしてくれというような言い方が自分の通勤圏内で今、起きています。ＡＮＡさんとか京急さんだったら、すんなり遠回りしてでも行けるような感じでやっているんですけど。

【猪狩ともか氏】
これも私の完全な知識じゃないんですけど、ＪＲさんの場合は駅員さんと案内する方が別々なんですね。私鉄の場合は駅員さんがそのままスロープを準備したりするんですけど、ＪＲさんは駅員さんとお手伝いする方が違う業務になっていて、そこの連携とかもあるのかなと思っています。

【髙橋儀平氏】
ありがとうございます。すいません、時間の関係もありまして、かなり民鉄、東京都内でも少しずつ改善の対応はしているんですけれども、体験者の一人である、先ほどのファシリテーターの川内さん、短めに一言。

【川内美彦氏】
降りる駅に連絡するというのは確かですけれども、ＪＲの場合は確実に降りる駅でＯＫが出ないと乗せないという。他の民鉄は乗っている間に連絡を取ろうというようなことでスピードアップしているというところもあります。それからもう一つは、車いす使用者が彼らの想定以上に増えていて、駅の対応する人員が圧倒的に足りていない。だから現在でも駅によっては、エレベーターが付いていても、「1 時間待つかも」ということを平気で言うんです。それから、かつてはＪＲの各職員が連絡用の電話なんかを持って歩いていなかったとか、そういうふうなものもいろいろとあるんだろうと思います。とりあえず以上です。

【司会（眞鍋かをり氏）】
ありがとうございました。お時間もなくなってまいりましたので、そろそろ意見交換を終了したいと思います。皆さん、たくさんの意見どうもありがとうございました。
さあ、ここで、本懇談会の名誉顧問である谷垣禎一様より、本日のパネルディスカ

ッションの総括をお願いしたいと思います。谷垣名誉顧問、よろしくお願いします。

【谷垣禎一名誉顧問】

皆さん、こんにちは。都知事から名誉顧問という過分な大層な名前をいただいた、谷垣禎一でございます。きょうは、二つのテーマでいろいろご議論をいただいて、大勢の皆さまにも参加をいただいて、本当に充実した会になったなと思います。この二つの、特に『心のバリアフリーを広めるために』というテーマでご議論いただいたことは、これはしゃべり出すと長くなり過ぎるので控えますが、私が今まで政治の上で仕事をしてきたことといろいろ関連する部分で、あの問題はここととこういうことに影響しているんだなあとか、これからこういうことがもっともっと政治の中で議論されなきゃいけないなという刺激を山ほど与えていただいたというのが、きょうの実感でございます。

私、こういう障害を負いまして、今までは率直に申し上げると、障害者というのはみんな一色に見えていたんですが、自分が障害を負って、もう障害者の中にも本当に多様と申しますか、極端にいえば一人一人、違うといっていいんだろうと思います。けがをしてからそういう仲間もたくさん増えまして、日頃、毎日のこういうことがもうちょっと改善されないかということも山ほど伺うようになりまして、昔の政治仲間なんかにこういうことは解決できないかとかいうようなことも少しずつ提起をしているわけですが、なかなか問題が山積しております。でも、きょう素晴らしいなあと思いましたのは、この 2020 のパラリンピックが、われわれがどういう社会をつくっていくかということについて、こんなに大きなインパクトを与えているんだなあということをきょうは実感することができまして、素晴らしいなあと、こう思ったわけです。2020 が終わってしまっても、こういう刺激は途切れることなく、オリンピック・パラリンピックが終わったらおしまいということにさせてはいけないんだろうと私もきょう痛感をしたような次第でございます。

そして、そういうことを考えましても、もう一つ私、これも長くなっちゃいけませんが、やっぱり自分が障害を負ってみますと、これは個人モデルなのか何モデルなのか分からないですけど、やっぱり頑張っている方を見ると、前より自分自身が感動することが多ございます。あいつ頑張っているなあと、俺も負けないでやろうと思ったりすることが多々ございます。そういう中で、これは人によってさまざま、いろんな感覚をお持ちの方がいらっしゃるから、一概には言えませんが、私、リハビリやっていますと、リハビリ最初はつらいなあと思っていたんですけれども、やっているうちに、やっぱり俺、体を動かすのが好きなんだと、いい気持ちだなあと思うことが多々あるんです。このパラリンピックを機会に、障害があってなかなか体を動かす、そういうスポーツをやるような機会がないなあと思っていた方が、もっとフリーに体を動かすことができるようになるという環境をぜひ整えていきたいものだなあと、そんなふうにも思っている次第です。

そういうことにつけても、やっぱりこの 2020 は成功させなきゃいけませんので、さっき小池都知事がおっしゃったように、宝くじは買わなきゃ当たらない、パラリン

ピックはやっぱりみんなで応援に行かないと成功しない、きょうまた第2次募集だということでございますから、どうぞ皆さんご一緒に見に行こうじゃありませんか。
　きょうは本当にありがとうございました。

【司会（眞鍋かをり氏）】
　谷垣名誉顧問、ありがとうございました。それでは最後に、懇談会の閉会に当たりまして、座長、小池知事よりご発言をお願いいたします。

【小池知事】
　パネリストを務めていただいた方々、そして今、大変、貴重なご意見をいただいた方々、そして間が空いているのはもう何とかせんといかんと欽ちゃん頑張っていただいて、それに応えて応援団長も頑張っていただいて、皆さん、パラバリ懇の皆さま方のおかげで、こんなにパラリンピック東京大会を機会に、パラリンピックそのものと、そしてまた街がどうあるべきなのか、いや、心がどうあるべきなのか、こんなに皆さんと密にお話し合いができて、本当に私、うれしく思っております。きょうで3回目でございましたが、大黒摩季さんもイルカさんも、またいろいろ舞台があるかと思いますので、パラリンピックを通じての想いをまた皆さんにお伝えいただければと思います。
　64年の大会で初めて、1回目の東京大会で、オリンピックとそれから名称は違ったようなんですが、パラリンピックとセットで行われるようになりました。それからぐるぐると世界を2度目、回ってきて東京になって、そして東京でオリンピックとパラリンピックがまたセットで行われようとしています。だから、パラリンピックを2回、行うのは東京が世界で初めてということになります。64年の東京大会、あのときは、よくいわれるレガシーが首都高だったり、それから新幹線だったりということで、ハードがレガシーとして、そしてまた代々木の体育館、駒沢のオリンピックの会場というように、むしろハードの話がほとんどレガシーとして伝えられております。もっともその後、そのハードをベースにして高度成長、そしてまた大量生産・大量消費・大量廃棄と、このような日本の社会に進んでいったわけでございます。これが1回目の、日本の成長のきっかけになったのが1回目の64年東京大会であるならば、2020東京大会は、やはり成長は必要です。ただし、何でも大量生産・大量消費・大量廃棄ではなく、持続可能な成長でなくてはならないと、この間、随分、成長ということについても、私たちは大きく日本そのものも変わってきたと思います。
　それだけではなくて、今回、一番、大きなのは、持続可能な成長と成熟と、この二つがセットであるということでございます。やはりきょういろいろとアカデミックに、また実際パラリンピアンとして、またいろいろな形でこの東京の街でさまざまなバリアを見つけながらも、改善点などご提示をしていただいているパラバリ懇の皆さま、アブディンさん、ちなみにスーダンの方なんです。あんな日本語がうまいスーダン人はそうそういませんから。そして、あれだけ素晴らしいご提案をいただいたところでございます。いずれにしましても、持続可能な成長と成熟、その成熟の内容をより高

めていくのは、きょうのパラバリ懇で話し合われましたさまざまな観点を盛り込みながら、2020 パラリンピック大会が終わった後もこの成熟社会がさらに良くなっていくような、そんな努力を続けていかなければならないと思いました。

そしてまた、最後に名誉顧問として谷垣先生からは、きょうからパラリンピックのチケットの２次抽選受付という営業活動もしていただきました。ぜひ皆さん、パラリンピックを成功させていきましょう。そのためにも皆さん、ぜひぜひきょうからでございますので、よろしくお願いいたします。そしてＪＲのお話をいただきましたが、これから猪狩が担当いたしまして、どれぐらい良くなるのかを皆さんの声を聞きながら、また民鉄、ＪＲも民鉄なんですけれども、しっかりいろんなバリアをあらためて確認をしながら、そして成熟した東京という首都をつくっていく、それも皆さんとつくっていく必要があるとつくづく思いました。

きょうは第 3 回のパラバリ懇、本当に皆さま方のご協力によりまして、とても深いものになったかと思います。これを、この果実をぜひ 2020 大会、パラリンピック、あと 223 日後、そこからまた新しいストーリーを共に描いてまいりましょう。本日はご参加、誠にありがとうございました。

【司会（眞鍋かをり氏）】

小池知事、ありがとうございました。以上をもちまして、第 3 回東京 2020 パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会を終了いたします。皆さま多様なご意見いただきまして、本当にありがとうございました。そして、ご来場の皆さま、本日は最後までご参加いただきまして、ありがとうございました。